

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅶ 保健医療分野の実務における基本的課題 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点		研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-7-1	我が国の保健医療制度の現状と課題	I	○	日本の保健医療制度の仕組みと公認心理師の立ち位置を理解する。わが国は、世界にも類を見ない国民皆保険制度を60年以上にわたって発展させてきたが、超高齢社会を迎え、高騰する総医療費の負担が大きな国家的課題となっている。そのような限りある状況において、公認心理師に新たに求められるものは何かを考える。	吉川 隆博(東海大学、教授)	◎	48分
		II	○				
		III	○				
		IV					
		V					
C-7-2	チーム医療とリーダーシップ	I	○	医療観察法制度のなかでは、公認心理師もチーム医療の一員に位置づけられる。チーム医療における公認心理師の役割は心理アセスメントや個人心理療法だけでなく、コーディネートやケースマネジメントも含まれる。本単元では、心理学の知識と技能を生かし、円滑なチーム医療の遂行に寄与するための公認心理師の活動を学ぶ。	畠山 卓也(高知県立大学、准教授) 古村 健(名古屋市立大学大学院、准教授)	○	46分 53分
		II	○				
		III	○				
		IV					
		V					
C-7-3	一般身体科領域における公認心理師への期待	I		小児科(小児がん)、産婦人科(生殖医療)、外科(移植医療)救急医療(ICU)、災害医療等、一般身体科領域における心理アセスメントと支援に対する新しいニーズ(患者家族への支援を含む)について考える。特に、緩和ケアにかかわる身体科領域における公認心理師への期待と役割を概説する。	服巻 豊(広島大学、教授)	◎	100分
		II	○				
		III	○				
		IV	○				
		V					
C-7-4	生活習慣と未病状態への支援	I		今日、肥満や糖尿病、高血圧症、貧血等々、生活習慣に起因する様々な病態は、疾病化するよりも以前の未病状態(subclinical conditions)が長期間潜在することが指摘されており、その早期発見と早期介入の意義と方法論が提言されている。この問題は、被支援者のwell-beingとも深く関連することから、公認心理師としてどのような支援が可能かを検討する。	神田橋 宏治(としま昭和病院、医師) 竹中 晃二(早稲田大学、名誉教授)	△	64分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V	○				
C-7-5	保健医療分野におけるトラウマインフォームドケア	I		現在、さまざまな領域で注目されるトラウマインフォームドケア(TIC)の視点から、特に精神科医療における隔離拘束・身体拘束等のあり方を見直してみることの意義は大きい。また、最近の診療報酬改定における退院後支援相談員、あるいはPTSDに対する公認心理師加算等にも触れ、公認心理師が医療領域において念頭に置くべきTICの概念を理解する。	大岡 由佳(武庫川女子大学、准教授)	◎	64分
		II	○				
		III					
		IV	○				
		V	○				

実践力向上研修セレクト型 講義内容

講義群Ⅶつづき 保健医療分野の実務における基本的課題 【10講義】

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修No	研修課題	観点	研修内容	研修講師	講義形式	講義時間
C-7-6	精神科急性期病棟における多職種連携	I	精神科急性期病棟における治療をモデルに、多職種間のみならず、患者・家族への情報提供・共有のあり方、さらに近年普及しつつあるクリニカル・パスの有用性を理解し、改めて公認心理師に求められる情報共有のあり方を考える。(講義と対談)	三井 督子(京都大学大学院医学研究科 助教) 仁史(日本精神科看護協会 業務執行理事) 黒木 俊秀(中村学園大学、特命教授)	○	57分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-7-7	リスクアセスメントとクライシスプラン	I	チーム医療の現場では、多様な価値判断のなかでさまざまな葛藤が生じうる。たとえば、重大な他害行為を行った精神障害者の処遇拡大を判断する際には、適切なリスクアセスメントとケースフォーミュレーションに基づき、ケースマネジメントがなされる必要がある。本単元では、幻覚妄想の影響下で重大な他害行為を行った統合失調症患者に対する心理支援の事例を通して、公認心理師の専門性を生かした活動を多面的に学ぶ。(講義と対談)	古村 健(名古屋市立大学大学院、准教授) 野村 照幸(新潟医療福祉大学、教授) 黒木 俊秀(中村学園大学、特命教授)	○	42分 24分 23分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-7-8	地域在宅医療における公認心理師への期待	I	今日、小児科や精神科領域のみならず、すべての医療現場において虐待を疑われる事例に遭遇する機会が増えており、しばしば公認心理師も対応を依頼される。ここでは、小児救急の現場における事例を通して、虐待の早期発見と早期介入におけるトラウマインフォームドケア(TIC)の視点の意義、そして医療従事者が適切な対応を行なった後の経過から心理支援のあり方を考える。(講義と対談)	若林 英樹(三重大学、教授) 神田 橋 宏治(としま昭和病院 医師) 黒木 俊秀(中村学園大学、特命教授)	○	85分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-7-9	医療従事者の虐待対応とその後—TICの視点から	I	今日、小児科や精神科領域のみならず、すべての医療現場において虐待を疑われる事例に遭遇する機会が増えており、しばしば公認心理師も対応を依頼される。ここでは、小児救急の現場における事例を通して、虐待の早期発見と早期介入におけるトラウマインフォームドケア(TIC)の視点の意義、そして医療従事者が適切な対応を行なった後の経過から心理支援のあり方を考える。(講義と対談)	毎原 敏郎(兵庫県立尼崎総合医療センター、医師) 大岡 由佳((武庫川女子大学 准教授) 黒木 俊秀(中村学園大学、特命教授)	○	85分 21分 23分
		II				
		III				
		IV				
		V				
C-7-10	こころとからだの境界域：慢性一次性疼痛の臨床	I	「痛み」は、古来より医療を求める人々の最大の主訴であるが、2020年、国際疼痛学会は、それを「実際の組織損傷もしくは組織損傷が起こりうる状態に付随する、あるいはそれに似た、感覚かつ情動的不快な体験」と再定義した。これに対応して、ICD-11にも新たに「慢性一次性疼痛」のカテゴリーが登場した。ここでは、最新の「痛み」の理解に基づき、特に発達特性やトラウマが複雑に絡む慢性疼痛事例に対する支援について考える。(講義と対談)	黒木 俊秀(中村学園大学、特命教授) 杉山 登志郎(福井大学、客員教授)	○	80分
		II				
		III				
		IV				
		V				